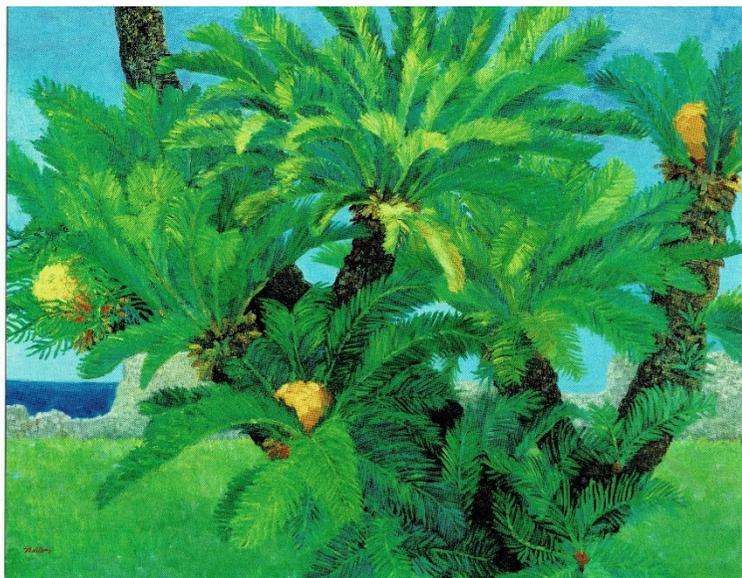


私のモチーフ

「蘇鉄のある風景を描く」

会員 板原 敏子

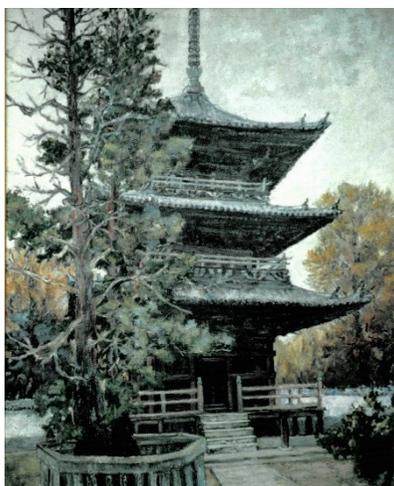


第10回日展(2023)

蘇鉄のある風景

板原敏子

油絵を本格的に始めてから、たくさんのモチーフに出会ってきました。約四十年前、私の娘二人が隣の絵画教室に通っていました。私も絵を習いたくなり、その教室の指導者でもある、中井長二先生に本格的に油絵を教えてもらうことになりました。初めは、花などを描いていましたが、そのうちに風景画を描きたくなり、高野山の伽藍や道成寺の五重の塔などのモチーフに移行しました。



「道成寺」

初めて示現会公募展に応募したのは約三十五年前で、アンティークな衣装ケースやランプ、日本人形をモチーフにした作品を出品しました。結果は落選でした。悔しきはありませんでしたが、東京上野の美術館(示現会展)へ二日間通いつめました。並んでいる沢山の素晴らしい絵画を見て、私にはまだまだ足りないものがあるのだと、思い知らされたのを今でも覚えています。



「古い市松人形」

ちょうどその頃、当時支部長をしていた山本龍昇先生に示現会和歌山支部に所属させてもらいました。それからは、人物画に挑戦したり、人形やオルゴール付きのメリーゴーランドの置物などをモチーフに描いていました。



それから、ピエロに扮した人物を描いたりしていましたが、ある時、同じピエロでも人物から人形に変えることを思いつきました。それは、メルヘンでもありながら無機質な雰囲気演出できるのはピエロの人形だと考えたからです。そして次の年の公募展では、念願の初入選を果たすことができました。それから数年安定して入選させていただけておりました。



「ドリーム」

そんなある日、連れ合い（夫）が、自宅でもある寺の境内の、樹齢五百年の蘇鉄の木を指差し「せっかく珍しい蘇鉄の古木があるのだから蘇鉄の絵を描いたらどうだ」と提案してくれました。考えもしていなかったことだったので、最初はどうか迷いました。入選させていただけようになり、ピエロの絵といえは、板原だと認識してくれているかもしれないのに、モチーフを変えていいのかと悩みました。

自宅は寺でもあり、しかも住職である連れ合いは、単身赴任で週末に寺に帰って来るという生活でした。そのため、当時は私と義母で、お参りや留守番をしていました。そんな状況もあり、出来るだけ留守にならないように且つ、制作活動するには、自宅にある蘇鉄をモチーフにするということは、ベストな選択でした。

きっかけは寺の都合を考えてのことでしたが、理由はどうであれ、描き始めると、これがまた面白くて。台風や虫の被害にあいながらも、何とか五百年生きてきた蘇鉄の力強さや、生命力などを感じながら描ける喜びがそこにはありました。

連れ合いは絵心が全く無い人でした。しかし、私の作品の批評や、アドバイスをよくしてくれました。絵心が無いというのに、割と的確なアドバイスをしてくれる、不思議な人でした。その連れ合いは十六年前に亡くなりました。蘇鉄を描くことを提案してくれたことは、感謝してもしきれないです。

連れ合いが亡くなって暫くしたある日、テ

レビで沖繩の城と石垣そして蘇鉄の風景が美しく映っていました。また別の日に、知り合いに、奄美大島には、蘇鉄が海辺に群生していると、教えてもらいました。私は寺の留守番を娘に頼み、早速奄美大島と沖繩のお城へ、取材スケッチに行きました。そこには、沖繩の歴史あるお城や石垣、そして美しい海と融合している蘇鉄が沢山ありました。それらを見て、とても感動し更にモチーフとしての蘇鉄の良さを、肌で感じる事ができました。

また、二〇一九年にギリシャ旅行に行った際、鉢植えではありましたが、蘇鉄の木が一對、ホテルの入り口に置いてありました。その蘇鉄は白い土壁とエーゲ海に美しく映えていました。その影響もあり、蘇鉄の背景に変化を付けたり、より蘇鉄を際立たせる演出を考えるようになりました。

三上浩先生に、「蘇鉄をよく見て、描かせてもらいます。というぐらいの気持ちで、制作しなさい。」と言われたことがあります。モチーフ選びも大切ですが、モチーフに対する自分の心も作品に反映されるのだと教えていただいたように思います。

これから、もしかしたらまた違うモチーフに出会うかも知れません。その時は、モチーフが何であれ、それに対して「描かせてもらう」という気持ちを忘れずにいたいと思います。